

令和8年6月30日発行「7月号」

ふじみだい

校長 田村 憲一

「校長先生の一番好きなグジャレは何ですか？」

国語の学習でインタビューにやってきた6年生。核心に迫る前に、場を温めるための質問がありました。そのひとつがこの質問です。かなりの難問でしたが、一生懸命答えました。

…むかし西城秀樹っていう歌手がいてね、「傷だらけのローラ」っていう曲を歌ってたんだよ。そのモノマネをしながら「ローラ♪」って歌うパターンが好きなんだよね。「あの人ってオーラがあるよね」「オ(ロ)ーラ!」みたいに使うの。「ローマ」とか「ソーダ」とか「コーラ」とか「コアラ」とか、いろいろ応用できるし。

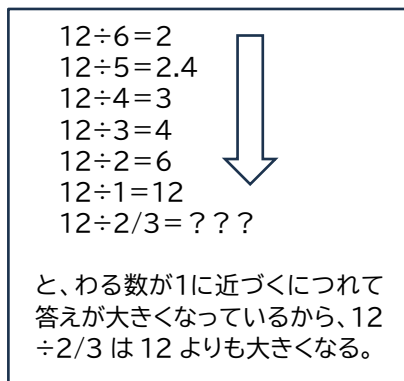
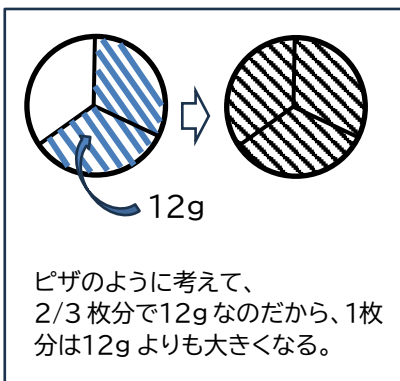
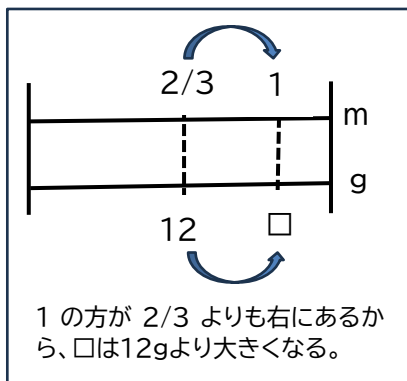
説明された子どももきょんとしていましたが、こうやって書いてみるとさらに分かりにくいですね。「アルミ缶の上にあるミカン」あたりにしておけばよかったか…

勉強って何のためにやるの？

もう何年も前の話です。クラス担任をしていた頃、4月の最初の授業の時、どの教科でも子どもたちに聞いていた質問です。「算数ってなんでやるの?」「国語って何のため?」「理科って…?」。子どもたちは、面倒くさそうに答えてくれていたものです。先日あるクラスでも聞いてみました。「算数って何のためにやるの?」「将来役に立つから」といった抽象的なものから、「買い物とかで計算するから」という実践派、「受験のため」という切実なものまで出そろいました。どれももっともな答えです。

私はこう考えます。子どもたちが社会で活躍する時代は、価値観の違う多様な人たちと、「正解のない問題」の「最適解」や「納得解」を求めて協働していく力が必要になると言われています。算数は、その力を養うための学習である、と考えるのはどうでしょうか。算数は、基本的にはたったひとつの正解があり、その正解にたどり着くための道のりはたくさんあります。「答えは合っている」という安心感をベースに、自分はどんなふうを考え、どのようにしてその「正解」を導き出したのかを、相手にわかりやすく伝える力を養います。一方で、友達の考えを、相手を尊重しながら聞き、質問をしたりそのよさを認めたり、次からの自分の考えに生かしたりする力も養います。つまり、近い将来「正解のない問題」に向き合った時のために、算数の「正解のある問題」を利用して、着々と力を養っていくのです。

先日、「 $2/3$ mの重さが12gの針金1メートルの重さは何gでしょう」という問題を解いた後、「(わり算の商はわられる数よりも小さくなるはずなのに…) $12 \div 2/3$ の答えが12より大きくなる理由を説明しましょう」という問題にチャレンジしました。子どもたちは、いろいろな考え方で説明しようとしていました。



先月紹介した1年生の学びの姿。あのような学びを積み重ねてきた6年生が見せてくれた「考える力」や「説明する力」です。子どもたちってやっぱりすごい!と身が引き締まる思いです。